

“hhc 理念”の実現に向けて

エーザイ(株) 知創部
部長 高山千弘

エーザイの CSR には3つの側面があると考えている。

その第1は、明確な企業理念を持ち、全社員が理解・共有し、その理念を実現するために日々の事業活動を通じて、企業に課せられた使命、すなわちステークホルダーに対する価値創造を果たしていくことである。

第2は、利益が正しい方法と適切なプロセスで生み出されていることである。当社の事業活動における最大の目的は患者様満足増大であり、利益はその結果によってもたらされるという考え方である。

第3は、社会の一員としてコンプライアンス(法令と倫理の遵守)を日々の活動の根幹に据え、社会の期待に応えていくことである。

この考え方は、時代が変わっても決して揺らぐことはなく、世界のヘルスケアの一端を担うグローバル製薬企業として、ステークホルダーの信頼を獲得していくうえで大切なものであると認識している。

500 の hhc 活動プロジェクト

CSR の第1に掲げられている当社の企業理念は、患者様とご家族の喜怒哀楽を第一義に考え、そのベネフィット向上に貢献することであり、ヒューマン・ヘルスケア(hhc)という言葉にその思いをはせている。この基本的な考え方は定款にも定めている。この hhc 理念のもと、全役員・従業員が一丸となり、世界のヘルスケアの多様なニーズを充足することを通して、いかなる医療シ

ステム下においても存在意義のあるヒューマン・ヘルスケア企業となることを目指している。

当社では、国内外グループ企業の各部門・組織において、それぞれの日常業務の中で hhc 理念の実現に向けた取り組みを進めている。これを hhc 活動と称しており、現在、国内外グループ企業全体で約 500 の hhc 活動のプロジェクトが企画され、推進されている。

本稿では、海外で実践されている hhc 活動のうち、インドでの認知症の疾患啓発活動と米国でのがん克服に取り組む患者様の病院への送迎ボランティアを通じた活動の2つの事例を紹介する。

インド：認知症の疾患啓発活動

インドには約 210 万人の認知症患者様がいるとされているが、その中で実際に治療を受けている患者様は 10 万人に過ぎない。認知症という疾患自体があまり知られていないために老化現象の一つとして誤解されている、あるいは経済的負担から受診を躊躇する患者様が多いことなどが背景にある。当社のインドの事業会社 Eisai Pharmaceuticals India Pvt. Ltd. では、「スクリーニング・キャンプ(出張検診)」「メモリークリニック(もの忘れ外来)の設置支援」「メディアを介した広報活動」の3つの柱を中心とした疾病啓発活動をおこなっている。

スクリーニング・キャンプでは、毎土・日曜日にはボランティア医師とともに、コミュニティーに足を運び、高齢者に加齢・老化・認知症についての啓発活動と自己診断を実施している。これま



インドにおける認知症の啓発活動

でに、1,178 回の出張検診をおこない、25,000 人もの高齢者が検診を受けている。ここで症状が確認された患者様は、クリニックに受診を薦められる。また、53 カ所のメモリークリニック開設において、検査ツールの提供やスタッフ教育などの支援をおこなった。さらに、テレビ・ラジオ、新聞などのマスメディアを通して、認知症の啓発活動に徹底的に取り組んだ。

インドでは、これからも地域社会における認知症の正しい理解促進と認知症患者様の生活上の支援に取り組んでいく。

米国：がん患者様送迎ボランティア

当社の米国のボストン研究所では、米国がん協会が提供するボランティアプログラム「Road to Recovery」（1983 年に公式に発足）を積極的にお



がん患者様の送迎ボランティアをおこなうジョン・オア研究員

こなっている。ボランティア活動の参加者の 1 人であるジョン・オア研究員は、がん患者様が自宅から病院まで通院する際の車による送迎サービスを実践している。送迎活動における車の走行距離は、2006 年 1 月に開始してから、すでに 1,000 マイル（約 1,600km）以上に達している。自らの車を運転し、患者様を送迎する姿は、地元の新聞やテレビなどのマスメディアにも取り上げられ、周辺地域の方々の疾病に対する理解や、地元がん協会およびがん患者様との相互理解を深めることにもつながった。

現在、このボランティアに参加している 11 人のドライバーのうち、8 人は地元のメディアで紹介されたジョン・オア研究員の姿を見て関心を持ち、活動に参画した。このように、地元のボランティア活動の活性化にも貢献している。

ジョン・オア研究員は、患者様と直接交流することで患者様の喜怒哀楽を知り、創薬の重要さと緊急性をより一層理解することとなり、自らの創薬研究活動の中でも活かしている。さらに、その経験がボストン研究所の全社員に共有され、創薬に対するさらなる熱意につながっている。

ボストン研究所では、今後もこれらの活動を通して地域社会との良好な関係の構築につとめていく。

◆エーザイの社会・環境活動

<http://www.eisai.co.jp/social/index.html>